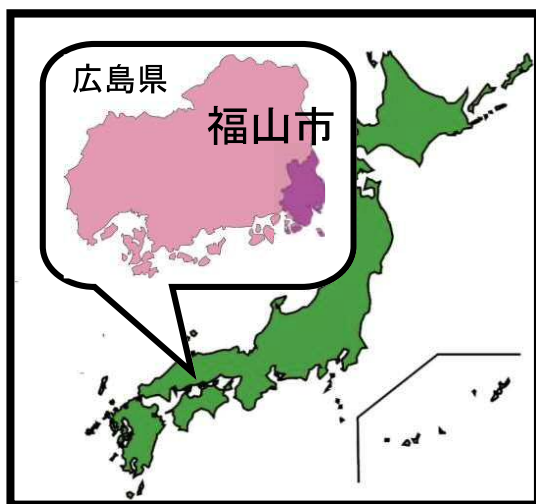


● ● ● 定期的なヒヤリ・ハット事例の発表と団員への周知について ● ● ●

広島県福山市消防団
第8方面隊長 益川 幸育

1 はじめに



福山市は、広島県の東南端、瀬戸内海沿岸のほぼ中央部に位置し、岡山県と境界を接し、南は瀬灘（ひうちなだ）を隔てて愛媛県に接しています。市内は東西約 29.5 キロメートル、南北約 45.7 キロメートルにわたり、面積は約 518 平方キロメートル、人口は約 47 万人のまちです。

市内には、古くから潮待ちの港として栄えた「鞆の浦」や、鎌倉時代に明王院の門前町として栄えた、芦田川中洲の「草戸千軒町遺跡」などを擁し、



新幹線ホームから間近に見える福山城

江戸時代には福山藩として文化・産業を育んできました。

産業では、古くから地場の繊維産業を基盤としてきたほか、大手製鉄会社の進出により重工業でも発展してきました。

まちの特色としては、戦争という悲しい歴史を乗り越えるため市民が一筋の光を“ばら”に求めたことを契機に、「ばらのまち福山」としてのまちづくりを進めており、市民や団体、事業者などと行政が手を取り合ってまちづくりを行っています。

2年後には市制施行100周年を迎え、それに向けて「100万本のばらのまち福山」を目指し、“ばら”を通じて「思いやり・優しさ・助け合いの心」を表す『ローズマインド』を市民全員で育んでいこうとしています。

2 福山市消防団の概要

福山市消防団は、1団本部61分団、条例定数2,864人、実員2,850人で活動しています。

団本部には団長1人、副団長8人、団本部訓練指導員8人、女性消防団員30人が所属しています。各分団は8つの方面隊に分かれており、副団長が各



バラの花が咲き誇る緑町公園（福山ばら祭）

方面隊の隊長を務めています。また、団本部訓練指導員も各方面隊から推薦された団員が当たっており、方面隊長の補佐役としての役割も担っています。

各分団においては、消防活動の基礎となる消防操法にも熱心に取り組んでおり、昨年度の広島県消防操法大会では当市道上分団が小型ポンプ操法の部において見事優勝を果たし、今年11月に東京臨海広域防災公園で開催される全国消防操法大会に向け、鋭意訓練に励んでいるところです。

今回の報告事例である「ヒヤリ・ハット事例の発表」は、その道上分団も属する第8方面隊（6分団、団員数391人）が行っている取組です。

3 ヒヤリ・ハット事例発表を始めた経緯

福山市消防団第8方面隊では、以前から訓練中の負傷事故が定期的に発生していたほか、2012年度になって車両事故が立て続けに発生しました。

以前から事故防止のためには、方面隊長として注意喚起の文書を定期的に出していたほか、2012年度の車両事故を受けた対策として、団員に警笛を携帯させ、車両の後退時等には必ず笛を活用した誘導を徹底させることとしましたが、その対策後にも車両事故が発生してしまいました。

そこで、新たな抑止策を検討した結果、分団長等の方面隊の分団幹部を集めた「ヒヤリ・ハット事例の発表会」を実施することとしました。（初回は2013年6月）

事例発表会は、2か月に1回の割合で定期的実施し、事例発表だけでなく、事例に対する対策



発表会の様子

についても発表することとしています。

また、発表内容は文章にまとめ、方面隊員の全員に配付周知しています。

4 取組の成果と今後について

ヒヤリ・ハット事例の発表は、方面隊の分団ごとに行う形式としています。

他の分団におけるヒヤリ・ハット事例や対策を聞くことで、もしかしたら我が分団・班にも同様の事例が起こるかもしれないという危機感を覚えることにつながっています。そして、他の分団の対策を知ることによって、自分の分団にも活用したり、更に発展した対策を考え出したりすることにもつながっています。

また、事例発表のためには、各分団において分団幹部が分団員から事例を聞き取る作業を伴います。その聞き取り作業によって分団幹部からは、「安全管理について、分団員と話をすることが得られるとともに、分団員が抱える問題、班・分団として抱える問題を聞くことができる。それによって問題への対応と、分団員への指導がやりやすくなった」という意見を聞いています。

そのほか、事例発表を方面隊員全員に文書で配付することによって、次の効果が現れていると聞いています。

- ・活動経験の少ない団員にとっては、実経験にはならないが、イメージとしての経験を増やすことができている。
 - ・方面隊の取組として「ヒヤリ・ハット」に重点を置いていることが認知されており、分団員レベルでも今まで以上に活動中における安全管理意識が高まっている。
 - ・ヒヤリ・ハット事例の聞き取りのために、分団幹部と分団員が話をすることで、分団員は活動中に、危険因子を探る意識ができてきている。
- ヒヤリ・ハット事例の発表によって、各団員の意識が高まっている中で、更なる取組も始まりま

した。

車両事故撲滅に向けて、運転技術の向上を目指し、分団各班において、若い団員、普段あまり車を運転しない団員に対しての運転講習を定期的に行うようになりました。

訓練中の負傷対策としては、訓練時にスポーツトレーナーの資格を持つ団員が中心となって、準備体操、整理体操を徹底する分団も出てきました。

ヒヤリ・ハット事例の発表を始めてまだ1年ですが、この取組は、団員一人ひとりがしっかりと事故防止の意識を持つことに効果的だと考えています。

今後も、定期的に入団する新入団員への教育と、ベテラン団員の慣れからくる気の緩みを防ぐためにも、継続実施していく中で、負傷・車両事故ゼロの消防団活動に努めていきます。



車両事故撲滅に向けた対策（車両長の確認事項）

福山市消防団第8方面隊 ヒヤリ・ハット事例（抜粋）

事 例	原 因	対 策
火災現場で車両を入れ替える際、道の状況が悪く、脱輪しそうになった。	移動の際の周囲の確認不足	道路状況までしっかり確認する。 誘導員の配置を徹底する。
火災現場でホースが破裂した。	資器材の点検不足	資器材点検をしっかりと行う。
夜間の作業中、一般車両が不意に体近くを通り過ぎた。	自分の存在を示す対応をしていなかった。	反射ベストを着るなどの対策を行う。
傾斜角のきつい坂道で、ホースカーがひっくり返りそうになった。	焦っていた。 人数が十分でなかった。	十分な人数で、焦らず安全に作業を行う。
放水中に破裂したホースを交換する際、暴れる金具が当たりそうになった。	送水が完全に止まらないうちに交換しようとした。	指示をちゃんと聞くことと、一人で作業せず同伴者をつける。
夜間、水源確保のため、池に近づこうとした際、足元がよく見えず落ちそうになった。	現場の視界不良	ライトの携行を徹底し、特に足元への注意を払う。